

I 調査の概要

1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらにそのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 調査の対象学年及び調査を実施した学校・児童生徒数

	対象学年	実施学校数（校）	児童生徒数（人）
小学校	第6学年	17	906
中学校	第3学年	8	799
合 計		25	1,705

3 調査の内容

(1)教科に関する調査 (国語、算数・数学)	出題範囲は、調査する学年の前学年までに含まれる指導事項を原則とし、出題内容は、それぞれの学年・教科に関し、以下のとおりとする。 ① 身に付けておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり、常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能 等 ② 知識・技能等を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力 等 調査問題では、上記①と②を一体的に問う。
(2)質問紙調査	・児童生徒に対する質問紙調査～学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等 ・学校に対する質問紙調査～指導方法に関する取組、教育条件の整備の状況等

4 調査方式

悉皆調査（対象は小学校6年生、中学校3年生）

5 調査期日

令和6年4月18日（木）

6 調査結果の解釈等に関する留意事項

本調査の結果については、児童生徒が身に付けるべき学力の特定の一部分であることや、学校における教育活動の一側面であることなどを踏まえる必要がある。

II 結果の概要

1 教科に関する結果の概要

- 小学校6年生は、国語は全道・全国平均を上回っています。算数は全道平均を上回り、全国平均と同程度です。
- 中学校3年生は、国語・数学ともに全道・全国平均を上回っています。

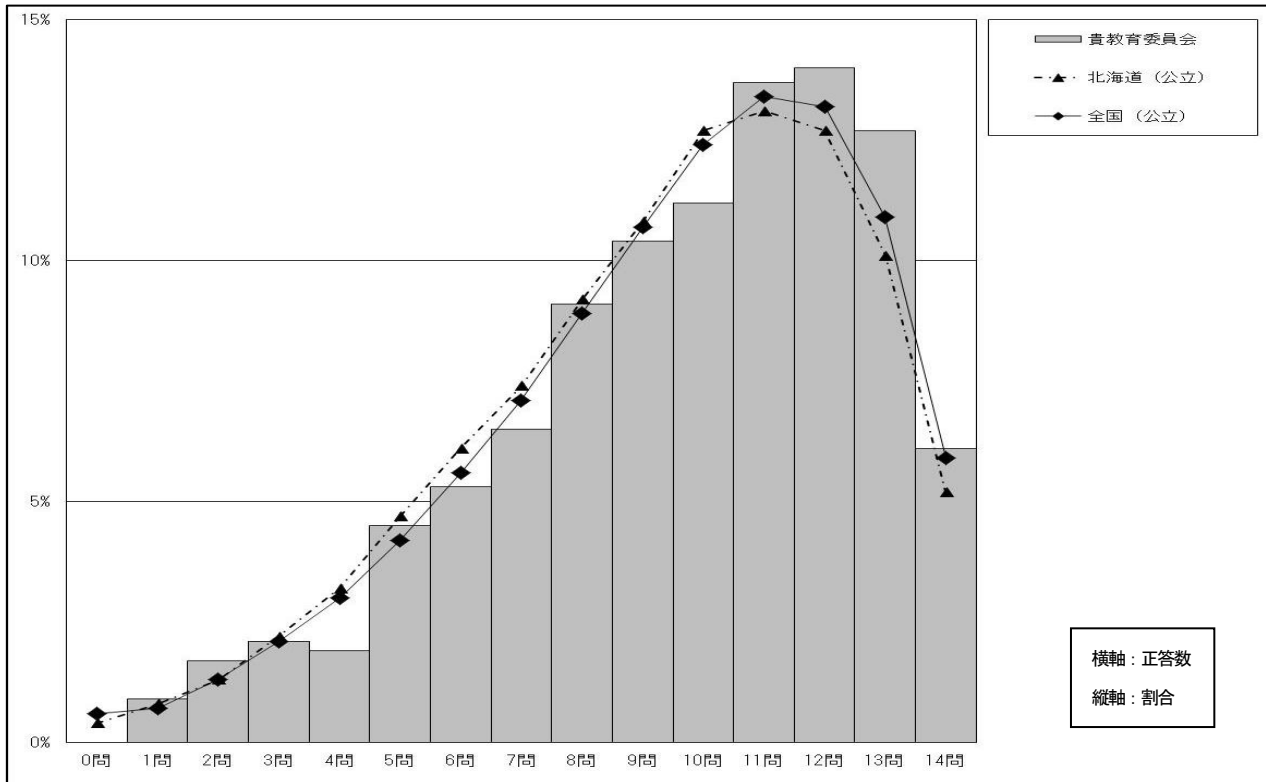
2 質問紙調査に関する結果の概要

- 「授業中の私語が少なく、落ち着いていると思う」割合は、小学校94.1%、中学校100%（中学校は4年連続100%）で、全国平均を大きく上回りました。また、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」割合も、小学校、中学校ともに全国平均を上回り、江別市の小中学校は大変落ち着いた状態にあると言えます。
- 「自分にはよいところがあると思う」割合は、小学校、中学校ともに全国平均を上回りました。子どものよさを認めるよう声かけを行うなど、各学校で行われている自己肯定感を育む取組の成果が表れています。
- 「ICT機器を活用した授業を週3回以上行った」割合は、児童生徒質問紙、学校質問紙の両方で、小学校、中学校ともに全国平均を大きく上回り、ICT機器を活用した授業が積極的に行われています。
- 「前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行った」割合は、小学校、中学校ともに100%で、全国平均を大きく上回り、小中一貫教育の柱の一つである「系統的な指導」の充実に向けた取組が進められています。

Ⅲ 各教科の結果

1 小学校 「国語」

＜正答数分布グラフ＞



	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
江別市教育委員会	905	9.7 / 14	68.9
北海道（公立）	34,531	9.3 / 14	66.8
全国（公立）	947,364	9.5 / 14	67.7

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体			14	68.9	66.8	67.7
学習指導要領の内容	知識及び技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	4	67.0	63.3	64.4
		(2) 情報の扱い方に関する事項	1	88.3	86.3	86.9
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	76.1	74.3	74.6
	思考力、判断力、表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	60.1	58.3	59.8
		B 書くこと	2	68.7	67.4	68.4
		C 読むこと	3	71.6	70.4	70.7
評価の観点		知識・技能	6	72.1	69.0	69.8
		思考・判断・表現	8	66.6	65.1	66.0
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	10	70.5	68.9	69.9
		短答式	2	63.9	58.9	59.7
		記述式	2	66.3	64.2	64.6

＜結果＞

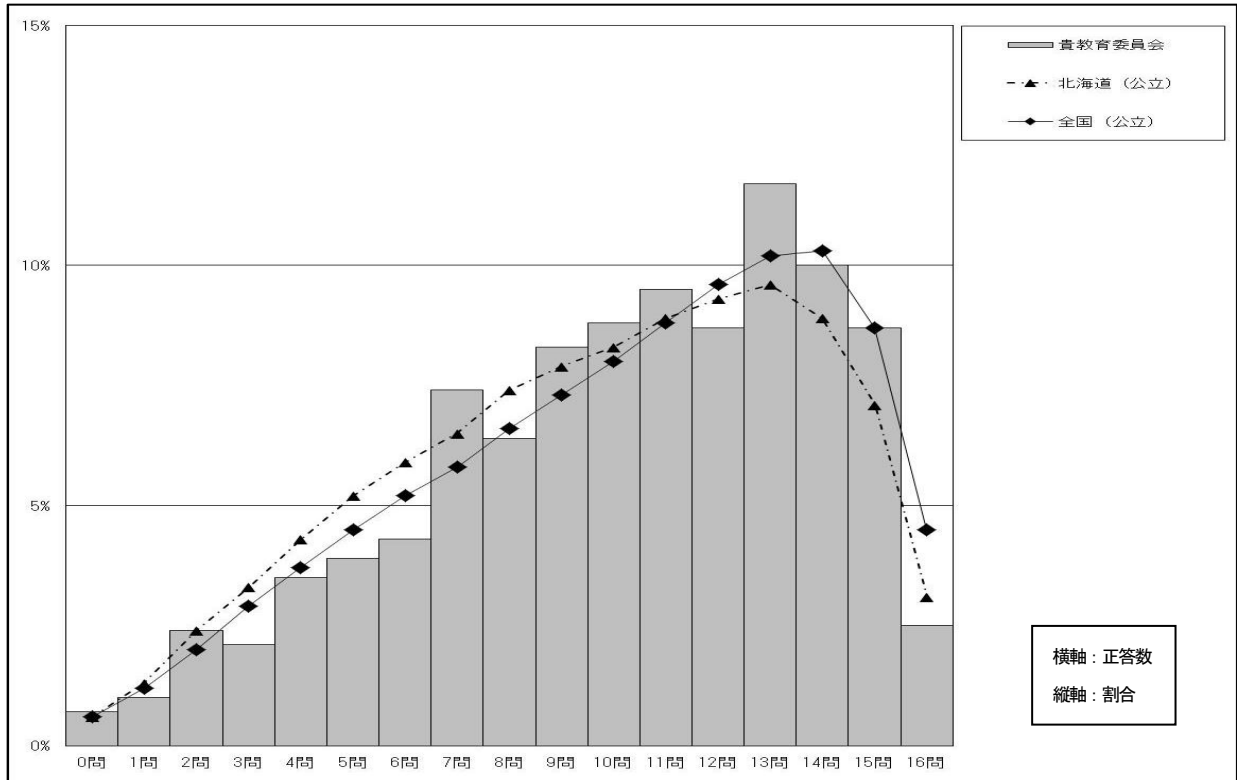
- 平均正答率は68.9%で、北海道を2.1ポイント、全国を1.2ポイント上回っています。
- 学習指導要領の内容別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、すべての項目で全道・全国平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けしたりして、伝え合う内容を検討することができる」
話すことにおいて、自分の目的や意図に応じるとともに、聞き手の求めていることに応じて集めた材料をどのように整理すればよいかを考えることが大切です。

2 小学校 「算数」

＜正答数分布グラフ＞



	児童数	平均正答数	平均正答率(%)
江別市教育委員会	906	10.1 / 16	63.1
北海道（公立）	34,531	9.7 / 16	60.6
全国（公立）	947,579	10.1 / 16	63.4

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体		16	63.1	60.6	63.4
学習指導要領の領域	A 数と計算	6	65.3	62.5	66.0
	B 図形	4	66.1	64.7	66.3
	C 測定	0			
	C 変化と関係	3	50.8	47.8	51.7
	D データの活用	4	61.9	59.7	61.8
評価の観点	知識・技能	9	72.3	69.6	72.8
	思考・判断・表現	7	51.4	49.0	51.4
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	5	75.1	72.9	75.3
	短答式	7	61.1	58.8	62.0
	記述式	4	51.8	48.3	51.0

＜結 果＞

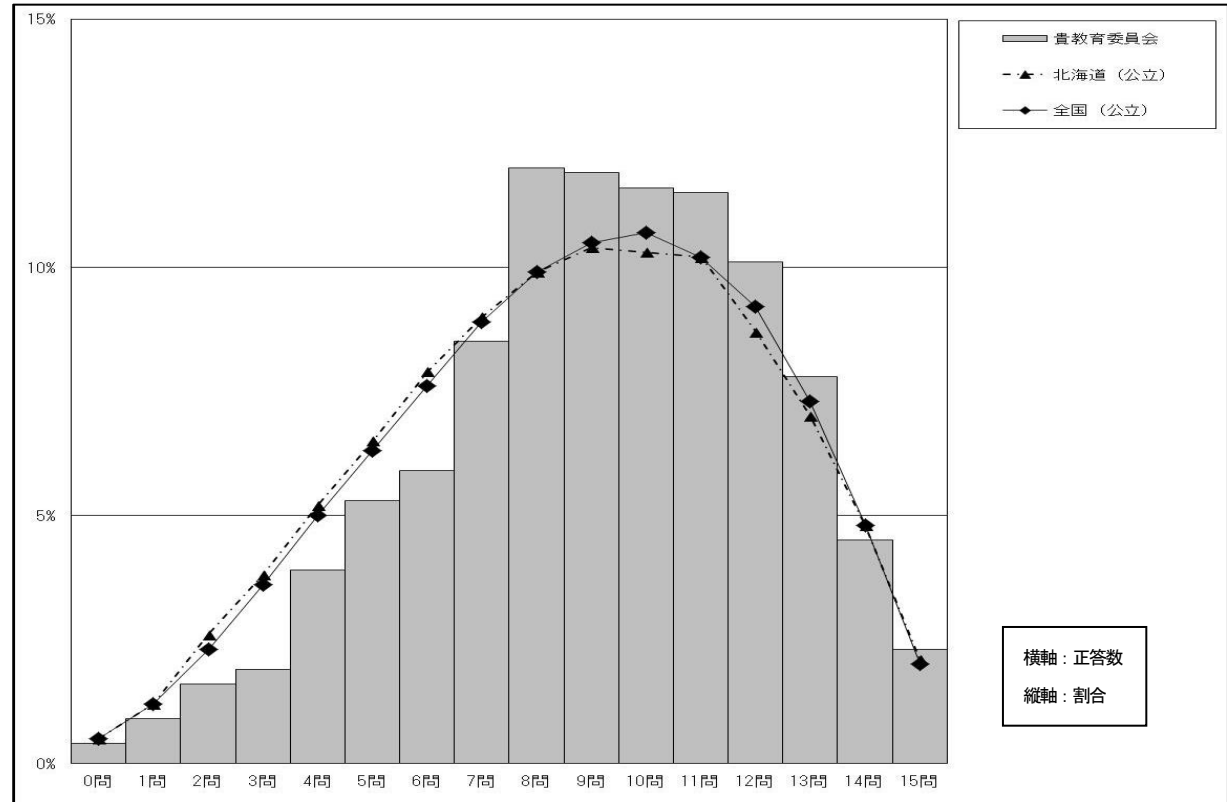
- 平均正答率は63.1%で、北海道を2.5ポイント上回り、全国を0.3ポイント下回っています。
- 学習指導要領の領域別平均正答率は、すべての項目で全道を上回っていますが、「データの活用」以外は全国を下回りました。評価の観点別平均正答率は、すべての項目で全道を上回っていますが、「知識・技能」は全国を下回りました。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことができる」
図形を構成する要素に着目し、図形の体積の求め方を考えるようにすることが大切です。
- 「除数が小数である場合の除法の計算をすることができる」
除数が小数の場合、除数、被除数を10倍、100倍して整数に置き換えて計算することが必要です。
- 「速さの意味について理解している」
日常の具体的な場面に対応させながら、速さなどの単位量当たりの大きさについて理解できるようにすることが大切です。

3 中学校 「国語」

＜正答数分布グラフ＞



	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)
江別市教育委員会	799	9.1 / 15	60.8
北海道（公立）	33,614	8.6 / 15	57.6
全国（公立）	875,574	8.7 / 15	58.1

分類		区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
				貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体			15	60.8	57.6	58.1
学習指導 要領の 内容	知識及び 技能	(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項	3	64.0	58.6	59.2
		(2) 情報の扱い方に関する事項	2	62.4	59.5	59.6
		(3) 我が国の言語文化に関する事項	1	79.6	74.8	75.6
	思考力、 判断力、 表現力等	A 話すこと・聞くこと	3	58.5	58.5	58.8
		B 書くこと	2	68.3	64.0	65.3
		C 読むこと	4	50.9	47.6	47.9
評価の観点		知識・技能	6	66.1	61.6	62.0
		思考・判断・表現	9	57.3	54.9	55.4
		主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式		選択式	9	64.3	60.8	61.0
		短答式	3	63.3	61.2	61.8
		記述式	3	47.7	44.1	45.5

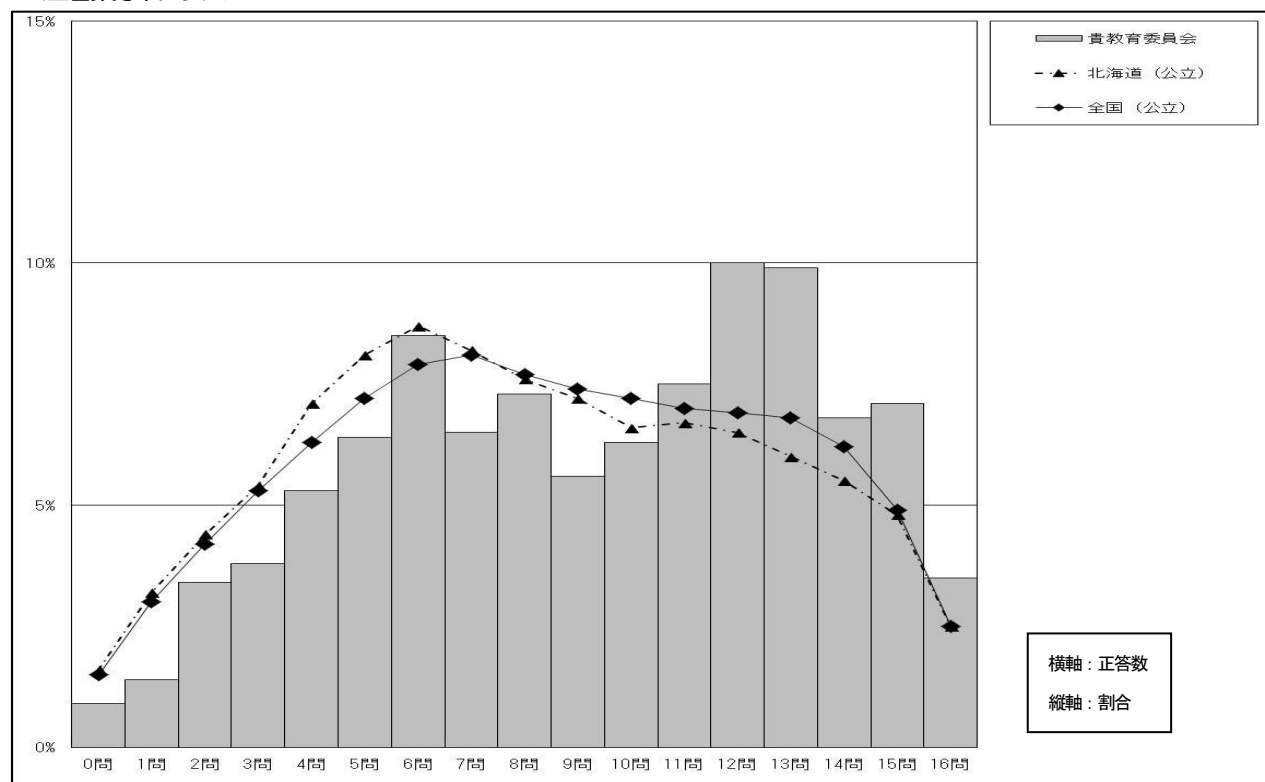
＜結 果＞

- 平均正答率は60.8%で、北海道を3.2ポイント、全国を2.7ポイント上回っています。
- 学習指導要領の内容別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、「話すこと・聞くこと」以外の項目で全道・全国平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「文の成分の順序や照応について理解している」
修飾語がどの部分にかかっているのかを理解することが必要です。
- 「短歌の内容について、描写を基に捉えることができる」
短歌の描写を基に、その情景から夕暮れ、夜、朝などの時間帯を適切に捉えるようにすることが大切です。

4 中学校 「数学」 ＜正答数分布グラフ＞



	生徒数	平均正答数	平均正答率(%)
江別市教育委員会	799	9.3 / 16	58.1
北海道 (公立)	33,598	8.2 / 16	51.0
全国 (公立)	875,952	8.4 / 16	52.5

分類	区分	対象問題数 (問)	平均正答率(%)		
			貴教育委員会	北海道（公立）	全国（公立）
全体		16	58.1	51.0	52.5
学習指導要領の 領域	A 数と式	5	57.1	48.4	51.1
	B 図形	3	45.2	39.3	40.3
	C 関数	4	65.0	59.7	60.7
	D データの活用	4	62.0	54.5	55.5
評価の観点	知識・技能	11	68.8	61.6	63.1
	思考・判断・表現	5	34.6	27.8	29.3
	主体的に学習に取り組む態度	0			
問題形式	選択式	5	62.9	57.1	58.5
	短答式	6	73.6	65.4	67.0
	記述式	5	34.6	27.8	29.3

＜結 果＞

- 平均正答率は58.1%で、北海道を7.1ポイント、全国を5.6ポイント上回っています。
- 学習指導要領の内容別平均正答率及び評価の観点別平均正答率は、すべての項目で全道・全国平均を上回っています。

＜正答率の低い設問及び学習指導の改善点＞

- 「事象を数学的に解釈し、問題解決の方法を数学的に説明することができる」
問題の意図を理解し、事象の中にある関数関係を見出し考察する場面において、問題解決の方法について説明することが必要です。
- 「複数の集団のデータの分布の傾向を比較して読み取り、判断の理由を数学的な表現を用いて説明することができる」
ある事柄が成り立つ理由を数学的に説明する際には、その根拠を明確にし、それに基づき説明することが大切です。

IV 質問紙調査の結果

1 「児童・生徒質問紙」

(1) 生活習慣

① 朝食を「毎日食べている」、「どちらかといえば毎日食べている」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	92.5	94.3	-1.2	0.4
中学校3年	90.8	88.8	-0.4	-2.4

② 「毎日同じくらいの時刻に寝ている」、「どちらかといえば同じくらいの時刻に寝ている」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	83.1	81.2	0.2	0.2
中学校3年	78.9	76.6	-1.8	-1.4

③ 平日、1日当たり「1時間以上ゲームをしている」

	令和6年度結果(%)	令和4年度結果(%)	令和6年度全国比	令和4年度全国比
小学校6年	79.2	81.3	4.9	5.2
中学校3年	66.9	73.5	-3.4	2.2

④ 平日、1日当たり「1時間以上SNSや動画視聴をしている」

	令和6年度結果(%)	令和4年度結果(%)	令和6年度全国比	令和4年度全国比
小学校6年	53.4	56.1	2.3	5.5
中学校3年	77.1	77.8	-2.1	2.0

朝食摂取、就寝時刻について、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均とほぼ同じでした。

スマートフォン等によるゲームやSNS、動画視聴を1日1時間以上している割合は、一昨年度と比べ減少しています。全国比では、中学校3年生が一昨年度に比べ大きく減少しました。

子どもたちが夢や目標を実現し、将来自立して生きていくためには、規則正しい生活習慣を身に付けることが大切です。しかし、スマートフォンの普及によりネットゲームや動画の視聴時間等は、減少してはいるものの高い割合を示しています。子どもの生活リズムの向上のため、学校、家庭、地域等が連携して改善に向けた取組をさらに充実させる必要があります。

(2) 学習習慣

① 分からないことや知りたいことがあった時、自分で学び方を考え、「工夫している」、「どちらかといえば、している」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	83.6		2.9	
中学校3年	83.2		4.6	

② 平日に、学校の授業以外に1時間以上勉強する(学習塾、家庭教師、インターネットでの学習の時間も含む)

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	68.6	64.6	14.0	7.5
中学校3年	62.4	60.8	-1.9	-5.0

③ 休日に、1時間以上勉強する(学習塾、家庭教師、インターネットでの学習の時間も含む)

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	57.1	57.9	8.5	5.4
中学校3年	66.8	65.9	3.8	0.6

「わからないことがあった時、自分で学び方を工夫している」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均を上回りました。また、「平日に学校の授業以外に1時間以上勉強する」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに昨年度より増加しています。「休日に1時間以上勉強する」割合は、小学校6年生で昨年度よりやや減少しましたが、全国平均を大きく上回っています。

家庭学習時間は増加傾向にあり、各学校での取組が一定の成果を上げたものと考えられます。今後も計画的に家庭学習が行われるよう保護者への呼びかけや児童生徒への指導を工夫していく必要があります。

(3) 自己肯定感

① 自分には、よいところが「あると思う」、「どちらかといえばあると思う」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	84.4	85.8	0.3	2.3
中学校3年	84.2	81.0	0.9	1.0

② 将来の夢や目標を「もっている」、「どちらかといえば、もっている」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	83.8	81.8	1.4	0.3
中学校3年	67.5	64.9	1.2	-1.4

「自分にはよいところがある」という割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均とほぼ同じでした。昨年度と比べると小学校6年生は減少しましたが、中学校3年生では増加しました。

将来の夢を持っている割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに昨年度及び全国平均を上回りました。

市内の小・中学校では、一人一人のよさや可能性を見つけて伝えたり、集団における所属感や成就感を高めたりする取組を進めています。

小中一貫教育の更なる充実と、活動や成果を蓄積して記録するキャリアパスポートの充実など、自己肯定感の醸成に継続して取り組んでいく必要があります。

(4) 主体的・対話的で深い学びの視点による学習への取組

① 学級で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている「そう思う」、「どちらかといえば、そう思う」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	89.4	84.8	3.1	3.0
中学校3年	89.1	82.5	3.0	2.8

② 授業で課題の解決に向けて、自ら考え、自分から「取り組んでいる」、「どちらかといえば、取り組んでいる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	84.9	82.6	3.0	3.8
中学校3年	81.5	81.8	1.2	2.6

③ 授業で自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てを「工夫して発表している」、「どちらかといえば、工夫して発表している」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	64.9	64.5	-2.7	0.8
中学校3年	64.0	55.3	-0.8	-6.8

「話し合い活動の中で、自分の考えを深めたり、広げたりすることができる」割合及び「課題解決に向け自ら考え、取り組んでいる」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均を上回りました。しかし、「話の組み立てを工夫して発表している」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均を下回りました。

学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められています。特に対話的な学習については、自分の考えをまとめたり、相手の考えを理解したりすることにより、工夫した発表や深い学びに結びつきます。今後も引き続き対話を取り入れた授業を構築し、改善を図っていく必要があります。

(5) 社会に対する興味・関心

① 地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う。「当てはまる」、「どちらかといえば、当てはまる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	86.2	79.4	2.7	2.6
中学校3年	73.4	61.0	-2.7	-2.9

「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思う」については小学校6年生、中学校3年生ともに昨年度を大きく上回りましたが、中学校3年生は全国平均を下回りました。

今後も地域の行事に参加すること等を通して、自分の住んでいる地域に関心をもたせ、社会に開かれた教育課程の実現を図っていく必要があります。

(6) 思いやり

① 「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思う」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	87.0	91.9	7.5	9.3
中学校3年	87.0	86.4	9.5	6.1

② 人が困っているとき進んで助けている。「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	93.6	92.5	0.9	0.9
中学校3年	90.6	89.0	0.5	0.9

③ 人の役に立つ人間になりたい「当てはまる」、「どちらかといえば当てはまる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	97.3	97.2	1.4	1.3
中学校3年	94.8	93.9	-0.4	-0.7

「いじめは、どんな理由があってもいけないと思う」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均を大きく上回りました。「人が困っているとき進んで助ける」及び「人の役に立つ人間になりたい」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに全国平均とほぼ同じでした。

今後も各学校で実施されているいじめ根絶に向けたアンケートや児童生徒主体の集会活動等を継続し、いじめを許さない環境づくりをするとともに、早期発見・早期解決のため、いじめの積極的認知を進めていく必要があります。

また、人への思いやりや規範意識を育むため、特別の教科道徳を中心に、学校の教育活動全体で道徳教育を推進していくことが大切です。

(7) ICT機器の活用

① 学校の授業で、PCやタブレットなどのICT機器を「週3回以上使用した」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	64.4	63.6	4.9	1.2
中学校3年	73.8	64.7	9.4	3.6

② ICT機器を活用することで、学習内容が「とてもよくわかる」「よくわかる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	89.5		-0.3	
中学校3年	89.5		0.5	

③ ICT機器を活用することで、自分の考えや意見を「分かりやすく伝えられる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	77.5		-1.7	
中学校3年	73.3		-4.4	

④ ICT機器を活用することで、友達と考えを共有したり比べたり「とてもしやすくなる」「しやすくなる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	85.5		-0.6	
中学校3年	82.3		-3.9	

「学校の授業でICT機器を週3回以上使用した」割合は、昨年度及び全国平均を上回りました。しかし、「学習内容がわかる」「自分の考えを分かりやすく伝えられる」「友だちと考えを共有しやすくなる」と回答した割合は、全国平均とほぼ同じか、下回っています。

新型コロナウイルスを機に一気にタブレットが普及し、各学校ではその効果的な活用について多くの実践研究がなされてきました。今後も授業改革の一環として、ICT機器の活用方法を工夫していく必要があります。

2 「学校質問紙」

(1) 学習規律

① 調査対象学年について、授業中の私語が少なく、落ち着いていると「思う」「どちらかといえばそう思う」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	94.1	100.0	8.6	12.4
中学校3年	100.0	100.0	6.2	4.9

「授業中の私語が少なく、落ち着いている」割合は、小学校6年生、中学校3年生（中学校3年生は4年連続100%）ともに全国平均を大きく上回り、江別市の小・中学校は非常に落ち着いた状態にあると言えます。

各学校においては、姿勢や態度、聞き方や話し方、授業開始のチャイムを守るなどの学習規律が丁寧に指導されています。また、どの中学校区においても、小中共通の学習や生活に関するスタンダードが確立されており、9年間の一貫した指導が行われています。

(2) 家庭学習

① 調査対象学年について、家庭学習の取組として、家庭での学習方法等を具体例を挙げながら教えた（教科共通） 「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	3.9	4.3
中学校3年	100.0	100.0	8.1	9.1

家庭学習の取組として、「家庭での学習方法等を、具体例を挙げながら教えた」割合は、小学校6年生、中学校3年生ともに昨年度同様100%となりました。

江別市の各小中学校では、学習内容を確実に定着させるために、家庭と連携を図りながら学習方法を具体的に指導し、家庭における学習の習慣化を図る取組が推進されています。

(3) ICT機器を活用した授業

① 学校全体で、教員がICT機器を活用した授業を「週3回以上」行った

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校	100.0	88.2	7.1	-0.3
中学校	100.0	100.0	8.1	10.9

② 調査対象学年について、児童生徒が、一人一人に配備されたPC・タブレットなどのICT機器を、授業で「週3回以上」活用した。

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校6年	100.0	100.0	6.8	9.4
中学校3年	100.0	87.5	9.2	0.8

「教員がICT機器を活用した授業を週3回以上行った」割合は、小学校、中学校ともに全国平均を大きく上回っています。児童生徒質問紙調査結果との齟齬が見られますので、各学校で確認するとともに、ICTの定義を理解させる必要があります。

江別市ではICT機器を活用した学習の推進を図るため、令和2年度から多機能型大型ディスプレイ（電子黒板）をはじめ、タブレット端末の全学年配置、ネット環境の改善等を進めてきました。各小中学校では、児童生徒の学習意欲を高め、分かりやすい授業が行われるよう、ICT機器を効果的に活用した授業を積極的に推進しています。

(4) 学校運営

① 児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルの確立を、「よく行った」「どちらかといえばよく行った」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校	100.0	100.0	3.6	3.8
中学校	100.0	100.0	3.5	4.8

「教育課程を編成・実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルの確立を行っている」割合は、小学校、中学校ともに、昨年度同様100%となりました。

江別市の小中学校では、全国学力・学習状況調査や江別市学力調査（NRT）等の結果を分析し、児童生徒の実態に合った教育課程を編成しており、「計画(Plan)－実行(Do)－評価(Check)－改善(Action)」の一連のサイクルによって学校改善及び授業改善を図る取組を継続して行っています。

(5) 全国学力・学習状況調査の活用

- ① 令和5年度の全国学力・学習状況調査の自校の結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するための活用を「よく行った」「行った」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校	100.0	100.0	3.2	4.0
中学校	100.0	100.0	5.9	7.0

「全国学力・学習状況調査の自校の分析結果について、調査対象学年・教科だけではなく、学校全体で教育活動を改善するために活用した」割合は、小学校、中学校ともに昨年度同様100%となり全国平均を上回っています。江別市の小中学校では、全国学力・学習状況調査結果を細かく分析し、次年度の教育課程に反映させるとともに、学校が一つのチームとして学力向上の取組を継続して行っています。

(6) 小学校教育と中学校教育の連携

- ① 前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を「よく行った」「どちらかといえば行った」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校	100.0		36.0	
中学校	100.0		31.0	

「前年度までに、近隣等の中学校と、教科の教育課程の接続や、教科に関する共通の目標設定等、教育課程に関する共通の取組を行った」割合は、小学校、中学校ともに100%となり、全国平均を大きく上回っています。

江別市では、昨年度から実施された小中一貫教育により、各中学校区での調査結果の交流を計画的に行っています。その中で、学力における共通課題等を明確にし、子どもたち一人一人の学力の向上に向けて「系統的な指導」を進めています。

(7) 家庭や地域との連携

- ① コミュニティスクール等の取組によって、学校と地域、保護者の相互関係が深まった「そう思う」「どちらかといえばそう思う」

	令和6年度結果(%)	令和5年度結果(%)	令和6年度全国比	令和5年度全国比
小学校	94.1		5.2	
中学校	100.0		15.9	

「コミュニティスクール等の取組によって、学校と地域、保護者の相互関係が深まった」割合は、小学校、中学校ともに全国平均を大きく上回りました。

江別市の小中学校では、「特色のある学校づくり」として、地域の特性を踏まえて取組実践項目を掲げ、教育関係者、地域・保護者が協力し合い、教育活動の充実を図る取組を推進しています。また、江別市の全小中学校に、地域に住んでいる退職教員など、教員免許を持つ学習サポート教員を配置し、複数の教員が指導するティーム・ティーチングや長期休業中・放課後に補充的な学習を行い、基礎学力の定着に大きな役割を果たすとともに、教員の負担軽減にもつながっていると言えます。

参考引用文献

令和6年度 全国学力・学習状況調査 解説資料（国立教育政策研究所教育課程研究センター）